

氏名	伊藤 由里子
学位の種類	博士（看護学）
報告番号	甲第 59 号
学位記番号	看博第 17 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	地域で生活する胃全摘体験者の経験の意味とプロセス Processes and Meanings of Experiences among Survivors who Underwent Total Gastrectomy in Local Communities
論文審査委員	主査 教授 藤田 佐和(高知県立大学) 副査 教授 中野 綾美(高知県立大学) 教授 荻沼 一男(高知県立大学) 教授 池添 志乃(高知県立大学)

論文内容の要旨

本研究は、胃がんという病気を生きぬいていくプロセスにおいて、地域で生活する胃全摘体験者に何が起きているのかを記述し、胃全摘体験者にとっての、がんを生きぬくという経験とその意味、プロセスを明らかにし、看護援助の示唆を得ることを目的とした質的記述研究である。

シンボリック相互作用理論を理論的基盤とし、半構成的面接法にてデータ収集し、ストラウスとコービン（2004）が開発したグラウンデッド・セオリー法の継続比較法を用いて分析を行った。研究協力者は、がんの根治術として胃全摘術を受け、手術から約 1 年が経過し、研究参加への同意が得られた胃がん体験者 23 名であった。倫理的配慮として、高知女子大学看護研究倫理審査委員会と協力施設の倫理審査委員会の承認を得た。

分析の結果、135 の概念、39 のサブカテゴリー、胃全摘体験者の経験の意味とプロセスを説明しうる【健康や生活全体につながる胃の喪失】、【胃のない身体で食べる鍛錬】、【養生で会得する経験知】、【養生を通して知る自分】、【胃を喪った身体で生きる覚悟】【受けとめと対処との連鎖】、【養生の経験を糧として開く自分の道】の 7 つのカテゴリーが見出された。さらにカテゴリーの関係を分析した結果、3 つの局面が明らかになった。

局面 1 『胃全摘体験者としての一人前になる』は、胃全摘者が【健康と生活全体につながる胃の喪失】と術後の経験を意味づけ、【胃のない身体で食べる鍛錬】を行い、【養生で会得する経験知】を身につけ、【養生を通して知る自分】に出会い、【胃を喪った身体で生きる覚悟】をするプロセスであった。

局面 2 『養生の経験を糧として開く自分の道』は、養生に耐えてきた胃全摘体験者が、これからどう生きるか自分との対話を行い、人としてだめになりたくないという気持ちを認識し、養生の経験から生み出される力と、胃がんと胃全摘術による傷つきと生きぬいてきたという誇りをもつ【養生の経験を糧として開く自分の道】であり、自分の強みとして、これから先の自分と生活に目を向けるようになる変化を表すものであった。

局面 3 『受けとめと対処との連鎖』は、胃全摘体験者が胃を喪った自分をどう受けとめるか

によって、がんという病気と胃全摘術、術後の養生に対する考え方や態度、人づきあいが方向づけられ、連鎖していることを表し、【受けとめと対処との連鎖】は、他の2つの局面に影響を及ぼしていた。

『胃全摘体験者としての一人前になる』プロセスをたどった胃全摘体験者は、『養生の経験を糧として開く自分の道』を歩むが、手術からの時間の経過によって、胃全摘体験者に新たな問題が出現したり、問題の優先順位が変更したりすると再び、『胃全摘体験者としての一人前になる』プロセスに逆戻りしていた。これらのプロセスは相互作用するとともに『受けとめと対処との連鎖』に規定されていた。

本研究では、地域で生活する胃全摘体験者のがんを生きぬく経験とプロセスとして、3つの局面を提示することができた。本結果は、地域で生活する多くの胃全摘体験者に、胃全摘術後についての見通しを提供し、彼らが生活の場から求めている看護援助の発展に貢献できると考える。

審査結果の要旨

わが国において罹患数の多い胃がんは、年間12万人以上が罹患し、5万人近くが胃がんにより死亡している。胃切除体験者は、退院後の生活において、食事摂取量の変化、体重の変化、何らかの術後後遺症を経験し、家庭生活、社会生活に支障をきたしている実態が報告されている。しかし、術後に起こった変化を、がん体験者がどのように感じ、受けとめているのか、がんの治療後、がん体験者が、どのように、再び、日々の生活にもどるのかについては、明らかにされていない。本研究は、胃がんという病気を生きぬいていくプロセスにおいて、胃全摘体験者に退院後の生活で何が起きているのかを記述することを目指し、体験者が社会や他者との相互作用を通しどのような経験をしているのか、経験をどのように意味づけ対応しているのか、どのようなプロセスをたどって変化するのかについて新たな知見を導いた意義ある研究である。

本研究では地域で生活する胃全摘体験者にとっての、がんを生きぬく経験とその意味、プロセスを明らかにするために、グラウンデッド・セオリーのもつ「当事者から見た経験の理論化」という力を用いて、がんとともに生きる経験を、胃全摘体験者の経験プロセスとして理論化できれば、胃全摘体験者の生活の質を高めるための看護実践を導く知識を構築することができると考え方法論を選択している。伊藤氏は、研究者として真摯に胃全摘体験者に向き合い、半構成的面接法を用いて23名からデータ収集をし、ストラウスとコービン（2004）が開発したグラウンデッド・セオリー法の継続比較法を用いて語りを丁寧に分析し、結果を導いている。

研究の成果として、胃全摘体験者の経験の意味とプロセスを説明しうる【健康や生活全体につながる胃の喪失】、【胃のない身体で食べる鍛錬】、【養生で会得する経験知】、【養生を通して知る自分】、【胃を喪った身体で生きる覚悟】【受けとめと対処との連鎖】、【養生の経験を糧として開く自分の道】の7つのカテゴリーと、『胃全摘体験者としての一人前になる』『養生の経験を糧として開く自分の道』『受けとめと対処との連鎖』の3つの局面を提示した。『胃全摘体験者としての一人前になる』プロセスをたどった胃全摘体験者は、『養生の経験を糧として開く自分の道』を歩むが、手術からの時間の経過によって、胃全摘体験者に新たな問題が出現したり、問題の優先順位が変更したりすると再び、『胃全摘体験者としての一人前になる』プロセスに逆

戻りしていた。これらのプロセスは相互作用するとともに『受けとめと対処との連鎖』に規定されていた。このことは地域で生活する多くの胃全摘体験者に、胃全摘術後についての見通しを提供し、胃全摘体験者の看護援助体系の発展に貢献できると評価できる。

以上のことから、本審査委員会は、博士論文審査基準に基づき提出論文を審査した結果、「地域で生活する胃全摘体験者の経験の意味とプロセス」は、研究テーマの着眼点、研究へ着実な取り組み、丁寧な分析過程、論証による考察、研究成果の有用性と実践への発展性、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士(看護学)の学位授与に値する研究成果であることを認めた。